



「それでは

勇者エオストレVS女格闘家ゼラの試合を開始します!」

コロシアムの司会者が声高々に宣言する。

僕：エオストレはダガーナイフを抜き

眼前の試合相手を見る。

「悪いけど…女性だからと言って

手は抜かないですよ」

「あらあら♡ 随分自信があるんですねえ

大丈夫ですよ♡

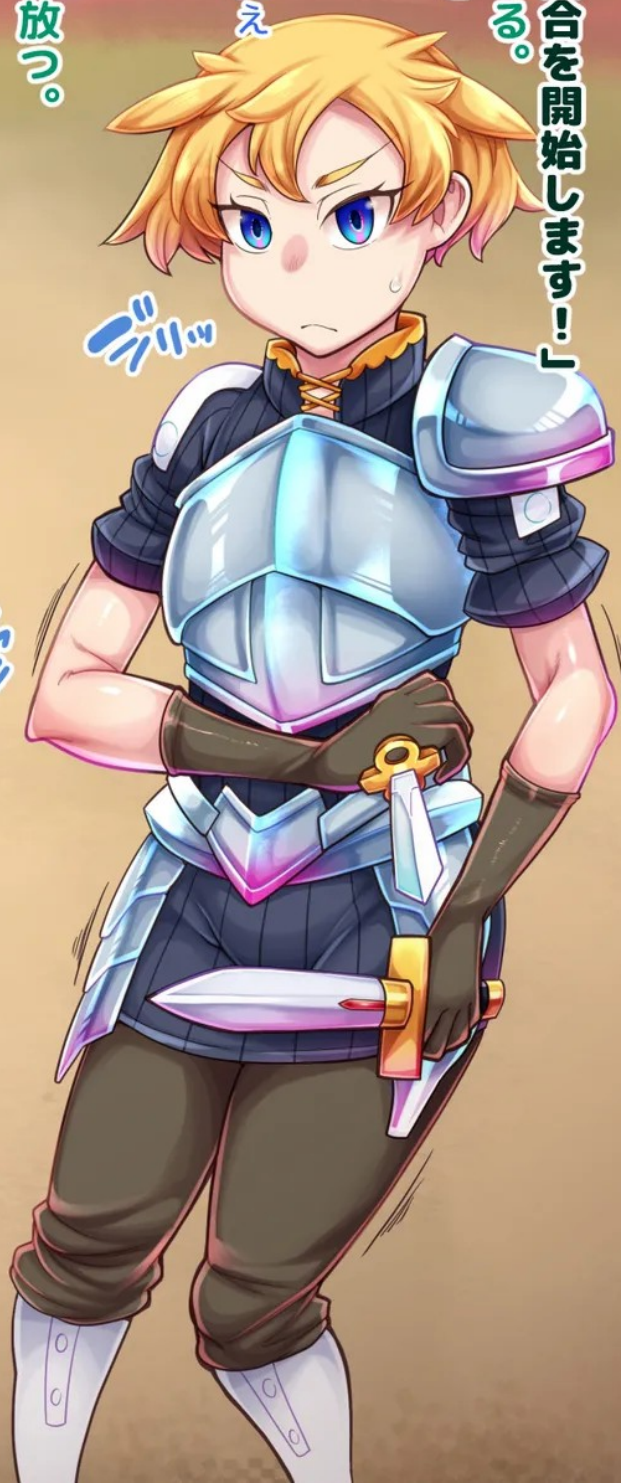
本気でかかってきてもらっても」

ゼラと呼ばれた女性は

にっこりと笑うと余裕そうにそう言い放つ。



ギリギリ



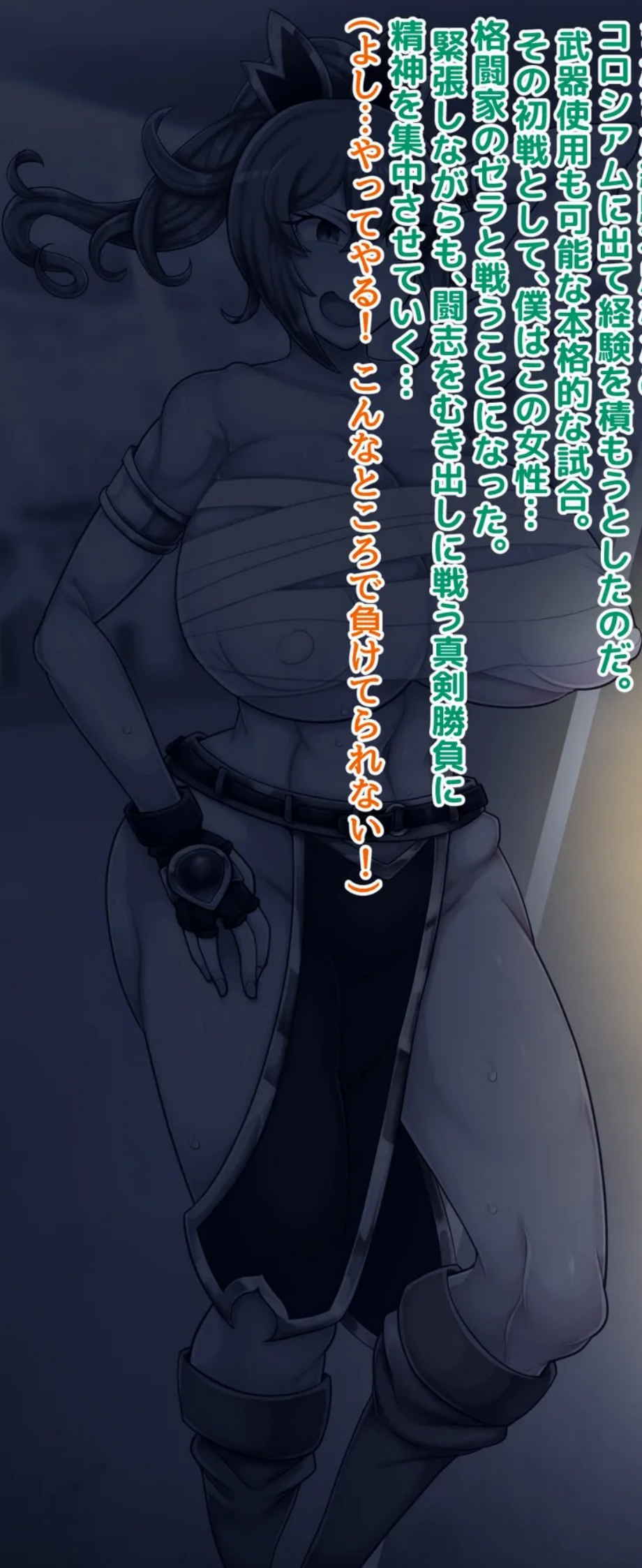
僕、エオストレは魔王を倒す旅をしている…のだが
まだまだ経験不足なため
コロシムに出る経験を積もうとしたのだ。

武器使用も可能な本格的な試合。
その初戦として、僕はこの女性…

格闘家のゼラと戦うことになった。

緊張しながらも、闘志をむき出しに戦う真剣勝負に
精神を集中させていく…

(よし…やってやる！こんなところで負けてられない！)



しかし、そんな僕の決意そっちのけで突然ゼラが腰布をまくり上げた。

「えっ……えええっ!？」

むっちりとした肉付きの良いお尻を見た僕は、驚きで目を見開く。

ゼラは「あはあ♥」と艶っぽい声を出すと

胸のサラシも緩め始めた。

あらわになるピンク色の乳首に

僕はワタワタと慌てる。

「なっとななな…何してるんですかあ!」

「何って見せつけてるんですよお♥」

ゼラはニタニタとした笑顔を浮かべると、腰をくねらせる。

大きなお尻やおっぱいが弾み

僕の視線を釘付けにさせる。

「うふる…ほおろ…♥」

だから、彼女の不穏な足の動きに僕は気がつかない。

「だっ!」

「ドキ」

「だっ!」

「ドキ」

「ドキ」

「だっ!」

「だっ!」



突然の衝撃で頭が真っ白になる。
その美脚から放たれた蹴りが
光の速さで鳩尾を突いたのだ。
鎧を着ているにも関わらず
衝撃が内臓を揺らす。
言葉も出ない苦痛に呻いている中
放たれた次の裏拳を側面に受け
初めて「うげえ」という言葉が
口から出る。
そこからは何かを言う暇もない。
遠慮のない連撃が僕に殺到する。



なすすべもできない僕は
この日彼女に
一回も反撃することができず
コロシアムの地面に倒れ伏した
起きた時には建物の
出口にごみのように
転がされていた



その日の夜、僕は街を出て、森の中を歩いていた。
意識を失っている間、衣服類はなんとか奪われていなかったが
武器や鎧など金目の物はすべて盗られてしまい
一文無しとなってしまっていた。

ゼラという女性に、ひどい負け方をしてしまってから

周囲の人間に笑われているのではないかと思い
すぐに街を飛び出てきてしまった。

しかし、こんな状態で出てくるんじゃないかと後悔する。

悔しさと惨めさから浮かでくる涙で
視界がぼんやりと滲んでいく。

気づいたら僕は
うつむきがちに
とぼとぼと森の中を歩いていた。

ずとぼとぼとぼ...

とぼ...

「くっそう...あのゼラって女の人
あんなやり方卑怯じゃないかあ
きゅ、きゅうに脱ぎだすなんて...
は、恥ずかしいのか...」

ザ...

ザ...

ザ...



「何言ってるんですかあ♥ ゆーしゃさま♥
見られるのが気持ちいいんじゃないですかあ♥
ほーらこんな風に♥」
「そんなバカなことがあるもんですか…
それじゃまるつきり変態ですよお」

ほいっ♥

おっ♥

「いいですよ
気持ちよければ♥
ほーらほいんほいん♥
「ほいんほいん…?」
「丸出しおっぱい頭にませちゃって
柔らかいですか♥」
「……」
「あれ? 勇者様?」
「……お……」
「お?」

ほいっ♥
おっ♥



「おっぱいいいああ！」

「うわあびっくりしたあ…大きな声出さなくてくださいよお」

「びっくりしたのはこっちだあ！」

「なんでここにいますかあ！」

「いいじゃないですかあ♡」

「ただ町を出る勇者様の背中を、追っかけてきただけですよ♡」



「たが」

「おっ」

「気楽に尾行するなあ！
くっそお 離せえ！
ぜ、全然動かないっ
な、なんだこの馬鹿力あ！」

「ああ♡ 女に力で負けてて卑怯とか言ってたんですかあ
…勇者様なのに恰好悪いですね♡
んふふ♡ かっわいいねえ♡ かわいい かわいいねえ♡
じゃあさっそく色々チエックしていきましようかあ♡」

「ガッ」
「ガッ」

「ん」
「ん」



「んっ……おっ……」

ど……どこ触ってるんですかあ……」

「どこってち○ち○ですよ♡」

ズポンの上からさわさわわってしてるんです♡

ふふ♡さわさわ♡さわさわあ♡」

だっだっ♡

おっ♡おっ♡

「あぁっ♡」

「あはあ♡」

かわいい声でましたねえ。

卑怯な女の手で

感じちゃったんですねえ♡」

「ちっ……ちがうっ！」

いいいい加減にしるお！」

だっだっ♡

さっ♡さっ♡

流石に我慢できなくなった僕は
本気で体に力を入れ、振り払おうとする——



「えっ……なにこれ……」
全力を出してゼラの拘束を抜け出そうとした時
僕は初めて脚に起こった異変に気が付いた。
僕の脚には、青い粘液状の物が纏わりつき
逃げ出そうとする動きを強く留めていた。

脚を動かそうとすると
粘液状のものは
意思があるかのように
適格にその形を変えて
動きを阻害する。
僕はこの物体を見たことがある。

「これは……スライム？」

ゴ
ゴ
ゴ

ガ
ガ
ガ

ど
ど
ど



「大正解♡♡ 偉い偉い♡♡」

ゼラは笑いながらそういうと、自身の体も変化させる。
足にまとわりついたスライムと同じような色、材質に変わっていく。
衣服はまるで溶けるように彼女の体から脱ぎ取られていき
どぶり…彼女の体に取り込まれてしまった。

「お前……スライムだったんですかっ」

「改めて自己紹介しましょうね。私はゼラ。格闘家のスライム娘で
強い男の人を探して旅をしています♡」

「スライム娘……ま、魔物が

ぼくをどうする気だ

何が目的だ」

「んふる♡♡

何ってわかりますよねえ。

ほらあ♡ち●ち●はよくわかってますよお。

こんなに勃起させちゃって……♡♡」

「ち、違うつ。ぼくは、ぼ…ぼっきなんてさせてない！」

「ん…？ 強情ですねえ…♡♡ うふる♡♡ じゃあ、これでもそんなこと言えるんですかあ？」



どぶり♡

ぷるん♡

べんべん♡

ぎん

ぎん

ゼラはそういうと、僕の足にまとわりつけていたスライムに目を向ける。

スライムは、明確な意思を持って動き出し、僕のズボンを覆っていく。

次の瞬間、スライムに包まれた僕のズボンがじゅうじゅうと異音を立て始める。

「ほおら♡ち●ち●は正直ですよ♡」

ものの1分もかからず、下半身の衣服はスライムによって溶かされてしまった。

ぼくの屹立した性器が外気にさらされる。

羞恥やら情けないやらで頭がぐちゃぐちゃになりつつある僕は
か細い声で尋ねる。

「うう……」

何がしたいんですかあ……」

「んふ♡ 本当は君みたいに

弱い男の子は

たまーにお菓子程度に

つまむだけなんだけどさあ。

負ける姿があまりにも可愛くって……

ちよーっと母性？が湧きまして……♡

頑張って戦った子にはご褒美あげないとなあ……っていうねえ♡」

「……ご褒美……？」



「ふふふ♡ほおらスライムお手々でシコシコしてあげましょうねえ♡」
ゼラは優しい手つきで僕の男性器を握る。
ひんやりとした粘性の感覚で
背筋をゾクツと快感が走る。

「わあ♡ギンギンですっねえ♡
大丈夫ですよ♡
気持ちよく射精させて
あげますからねえ♡」



「んあっ♡おまつ...や...やめろっ♡」
「しーとしー♡ 元気なおち●ち●」
「白いおしっこぴゅーぴゅーできるかなあ♡」
「ゆったりとしたペースだが
スライムの独特な感覚と
ゼラの優しい声かけが
僕の興奮をどんどん押し上げていく。」

「ほらいっちにいさんしい♡
どーですかゆーしやさま♡
気持ちいいですかあ♡」
「ああ♡やめ♡やめへえ♡ これっ♡
これまっずっ♡」
思わず情けない甘い声で喘ぐ僕。
興奮で口からは唾液が垂れ、
目には涙が浮かぶ。
男根からは、透明な液体が流れ出て
ゼラの手の中に飲み込まれていく。



「んふる♡我慢できなさそうですっねえ♡
大丈夫ですよ♡怖くないですよ♡」
「やだっ♡スライムになんか
射精させられたくなっ——んああっ♡」
「もおー♡強情なんですからー
まあ一回出しちゃえば
スライムだろうがなんだろうが
関係なくなりますし…
それに、スライム以外で
射精できなくてあげますからねえ♡」
「やつやだあっ♡♡
いきたくないいきたくないっ♡」
「んふる…ほら、イケ♡♡」



「んああっ♡ まだっ…まだ出るっ♡
きもちいいい…♡」

「あはは♡ ゆうしやさま、

ぴゅっぴゅ気持ちいいですねえ♡」

激しい快楽で目の前がチカチカと輝く。

腰は痙攣したまま

余韻が精液を尿道から押し出す。

「ふふ♡ ぴゅっく…ぴゅっく…♡

じんわり暖かくて幸せですねえ♡」



「ああっ…ああううう……」

やだあ…こんな…こんなスライム
なんかにい……くっそお」

「…うふふ♡ いいですねえ♡

まだまだ元気そうで

やっぱり私の目に狂いはないですね♡

だあいじょうぶですよお♡

まだまだこんなもんじゃ終わらない

ですからあ♡」

そういうとゼラは、腰砕けになった僕の
足を一瞬で払う。

僕はなすすべなく

地面に叩きつけられた。

「うっ……くあっ……スライムが体中に……」

地面に倒れ伏す僕。その上をまたぐように立つゼラ。ゼラの体から、どぼどぼと落ちてきたスライムが僕

の体を地面に押さえつけていく。

「ふふ♡ 私もそろそろ

こっちのほうに

ほしいかなあ♡」

「こっち……？」

「ま……まさか……」

ゼラはニタリと笑いお尻を突き出すように中腰となる。

「うふふ♡ 魔物のスライムま○こでいい子いい子してあげますねえ」



「や...やめっ」

止める間も無くゼラが巨尻を下ろす。

スライムマ○コ○の、独特な感覚が

僕の男性器を包み込む。

水のような感覚ではなく

少し硬めのクリームのような

優しくも反発のあるスライムが

ねっとり男根を優しく

くわえあげる。

「なっ♡なっ♡なにこれえ♡」

「んふる♡それじゃあ

いい子いい子

始めちゃいますね♡」

ハッハッ

♡♡

ぐわい

ハッハッ

ハッハッ





「うあっあっあっ
あっ♡ああっ♡」
「はいっ♡いい子っいい子っ
魔物マ○」で
気持ち良くなれるいい子っ♡」
むっちりとしたゼラのお尻が
僕の男性器をグニグニと揉み解す。
人間に比べて精密な
操作が可能なのだろう。
彼女の膣内は
時に柔らかく
そして時にはきつく
緩急をつけて自由自在に
責めてくる。

0
ちゅぽ

ちゅぽ
ちゅぽ♡

ちゅぽ

ちゅぽ



「うふふ♡いっぱい射精てますねえ♡
あー！入ってくるう♡

よわっちい人間の精子入ってきますよお♡」

「ひぎっ♡とまっ…とまらにやい…
でるっまだでるう…♡」

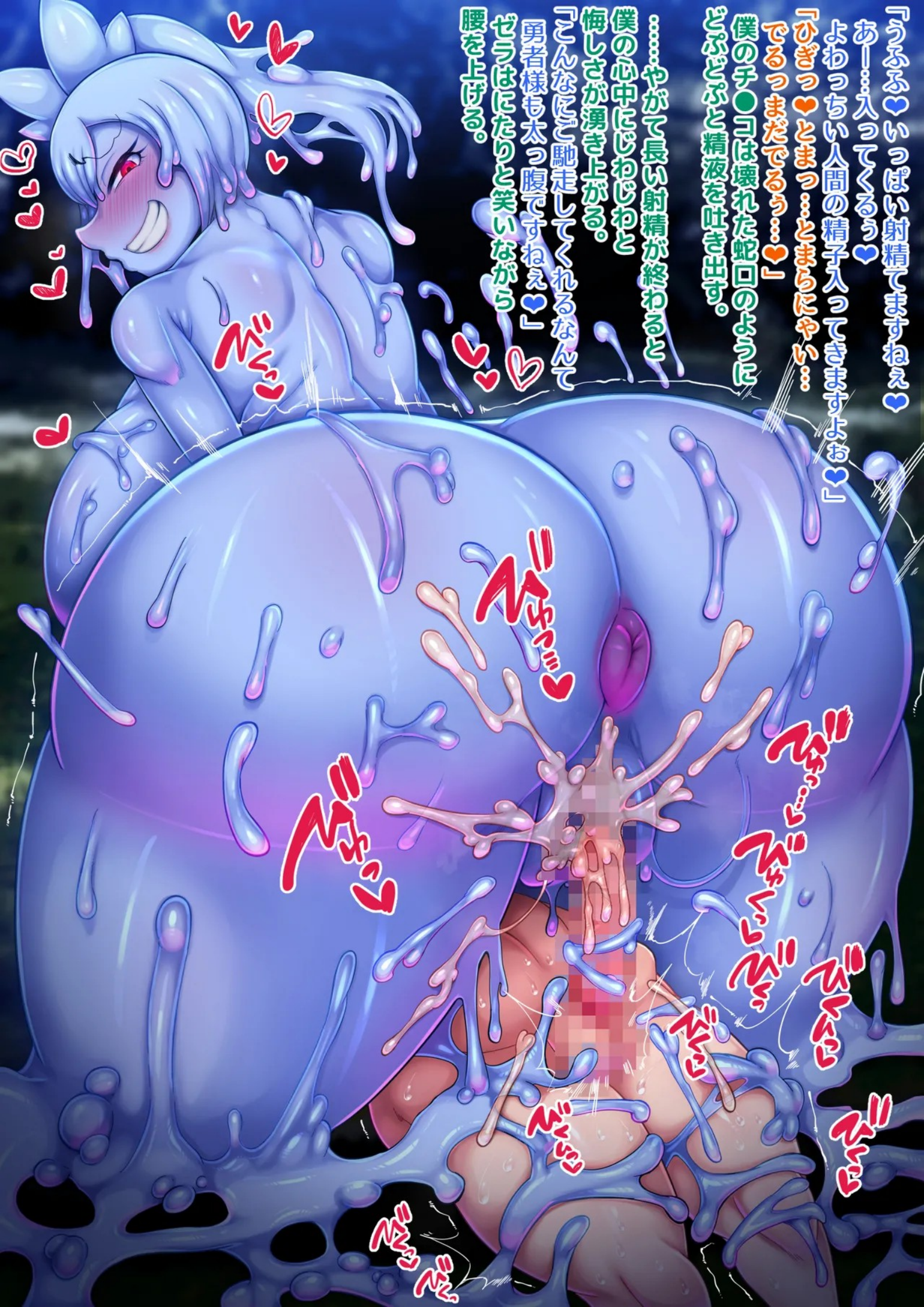
僕のチ●コは壊れた蛇口のように
どぶどぶと精液を吐き出す。

……やがて長い射精が終わると

僕の心中にじわじわと
悔しさが湧き上がる。

「こんなにご馳走してくれるなんて
勇者様も太っ腹ですねえ♡」

ぜうはにたりと笑いながら
腰を上げる。



青の粘液から解放された男性器が、だらりと外に出る。
激しい責めと自身の出した白濁液で、男根はぐちゃぐちゃになっている。

「あゝ♡漏れちゃいましたあ♡
いっぱいいっぱい
射精してくれたから
漏れ出ちゃったあ♡」
笑いながら
ゼラは股から
ボトボトと精液を
零す。



魔物に敗北し、あまつさえ蹴られたことに悔しさを募らせる。

「ふふ…でもまだまだ終わらないですからねえ♡」

本番はここからですよ♡♡♡とあえすおち●ち●のお掃除しましょうねえ♡♡

「んあっ♡なあっ♡」

そういうとゼラは、その身から再度スライムを僕の体に降らせる。

青い粘液が僕の男根や下半身に張り付き

一部は地面に溢れた精液の

上に落ちる。

スライムは

ぐちゃぐちゃと水音を

立てながら

精液をその身に

取り込んで…

…いや食らっていく。

たっ！

たっ！

んっ

んっ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「ふふ♡おいしいねえ♡ やっぱり見込んだ通り、魔力がいっぱいのおいしい精液…♡」
「やっ…やめっ…♡ またち●ち●たってくるうっ♡」
「ふふ…ほらあ♡ 元気になってきたねえ♡ じゃあ次はこういうのはどうかなあ♡」
「そういうと、ゼラはグルリと体を蠢かせ、僕の下半身にのしかかってくる。」

「ゆっしやさま〜おっぱいですよ〜♡」
ゼラはニタニタと笑いながら
僕の男性器をその豊満な胸で挟み込む。
めったたりとした独特の感覚が
男根を少しずつ締め上げていく。
「あっああ〜♡ なにこれえっ♡」
「さっきはちよ〜とと激しく
やりすぎちゃったので
今回はゆっくりと
気持ち良くなりましょうね〜♡♡」

ゼラは言葉通り
腕で挟んだおっぱいを
じわじわ動かしていく。
スライムの体なので
双丘は僕のち○こにびったりと張り付き
圧迫を与えてくる。
僕は快楽の緩急にただただ情けなく目を白黒させる。



「ふる…ほらほら♡ おっぱいちゅきでちゅか♡
ゆうちゃやま♡」

「なっ♡ やつやめるおそのいいかたあ♡
馬鹿にすりやなああ♡」

「ばかにしてまちえんよお♡
おっぱいだ♡いちゅきなゆうちゃやまに

も♡ときもちよくなうてほしいから
いってるんでちゅよお♡」

ぜうはゆるゆると腕の角度を変えて

胸で男性器を押し揉む。
射精感が快楽の底の方でまた湧き始める。

たっ♡
ちゅ♡

ぬほ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

たっ♡
ちゅ♡

ちゅ♡
ちゅ♡



「んふる 気持ちよさそうだねー♡
じゃあ次はこれならどうかなあ♡」
ゼラは胸をぶるんと振るわせる。

「なっなにこれっ♡」
途端に僕の男性器を包む胸の感触が変化する。
それはまるで、先ほど挿入していた女性器のように
乳内に細やかな肉ヒダが作られたのだ。



「あつあつ…♡でる…♡でる…♡でる…♡」

快楽に誘われた僕は

脳を溶かされるような幸福感とともに
精液を吐き出す。

甘やかされた、幸せな射精は

思考をばやかしていく。

「んふる♡かわいいですねー♡

流石に疲れちゃいましたねー♡

大丈夫、最後は私が

やってあげますよー♡」



「んあ……♡ な……なにこりえ♡」

「だいじょーぶ♡ 全部任せてくださいねえ♡」

快楽で痺れ切った思考の僕は

自分の尿道にスライムを入れられても

受け入れてしまう。

「タマタマの中は食べないですからねー♡

尿道に残った恥ずかしがりやな精液だけ

くださいねえ♡」

「あ……あ……♡」

スライムが精液を掃除していくのを
心地よく感じながら、僕は意識を手放して行った。

だ……だ……♡♡♡♡♡

び……び……♡♡♡♡♡

び……び……♡♡♡♡♡

だ……だ……♡♡♡♡♡

だ……だ……♡♡♡♡♡

す……す……♡♡♡♡♡

す……す……♡♡♡♡♡



やがて僕はまた森の中で目が覚めた。
太陽が少し上ったところだろう。
裸にされているのもあるが、
うっそうとした木陰の下は空気が寒い。

手足にはスライムが取り付けられており
全力で力を入れても振り払うことさえできない。
ゼラに襲われた昨夜(?)よりも
さらに深い森の中に移動させられたのか
昼なのにかなり薄暗い。





「あゝおはよう〜ゆづしやさま〜♡」
やがて、スライムの格好ではない、
人間に擬態したゼラが現れる。
「お前…僕をどうするつもりだっ」
「ん？」
スライムに拘束されて
ち○ち○フラスラさせてるのに
とっても元気だねー♡」
「お…おまええっ！」
怒りと羞恥で顔を赤らめる僕だが
実際裸にむかれている以上
喚くのが精一杯だ。

おっっっ

おっっっ
おっっっ
おっっっ

おっっっ
おっっっ
おっっっ

おっっっ

おっっっ

おっっっ
おっっっ

おっっっ

「んふふ♡そうやって大きな声を出しても誰もきてくれませんよぉ♡
私、特別製のスライムなので防音ぐらいの簡単な魔法ならできますし♡」

「なっ……」
僕の計画を一瞬で看破したぜうは目を赤く光らせて笑う

「んふふ♡
私さあ。ゆうしやさまのこと気に入っちゃったんですよね♡
だからあ今日も気持ちいいことしましうねえ♡」
ぜうはそういうと、ぬるりとすり寄ってくる…



「はあい♡じゃあます
興奮するところから始めましょうか♡」
「ゼラはそういうと、唐突にお尻を僕の顔に乗っけてくる。
最初は人間形態でやってあげますね♡
こっちの方もえっちくていいでしょ♡」
「女性器が鼻に乗せられたことで
むわんとした雌の匂いが直接肺に入ってくる。
僕は声にもならない悲鳴をあげながら
その雌臭を嫌というほど吸い込まれる。」



流れ出る愛液が口に流れ込み、甘酸っぱい味がしー
「んんんうんうっ!」

僕は体を震わせ、男性器を怒り立たせた。

いろいろ仕込んでおいたんですよね！
♡

例えば魔女が売ってる媚薬とかある♡

わたしスライムだから
体に液体を取り込めるんですよ♡」

笑顔のゼラの説明は耳に入らない。
僕は、突然の強烈な快楽に、息も絶え絶えになり――



「んんんんん♡♡♡♡♡」

触られてもいないのに射精してしまった。

「えっ……ええ♡♡♡♡♡」

そんなに気持ちよかったってことです？♡

えっ♡ かわいい♡♡♡♡♡

ゆうしやさまそれは可愛すぎませんか♡♡♡♡♡」

思わぬ射精に喜ぶぜうは

楽しそうにお尻をぐいぐいと押し付ける。

その度に精液がびくんと漏れ出る。



「んふる…想定外のお漏らしだったけど
…まだいけそうですねぇ♡♡♡」

ゼラは淫靡にいうと

僕の元気な男性器をうっとり見つめる。

こちらはまだまだ興奮が収まる様子はなく

尻の下でまるで犬の様に荒い息をあげ

甘い雌の匂いを吸い込み

何度も媚薬の体液を口にする。

「うふる♡ じゃあいきますよぉ♡

ゆっしやさまぁ…♡♡♡」



ぐいぐい♡

ガッガッ

ガッガッ

べべ

ガッ

「あはあ♥ ゆうしやさまのおち○ち○臭くっせらへんお♥
「や…やめさお…♥」

僕を無理矢理立たせたぜうは
腰元にかがみ顔を突き出し、男性器の匂いを嗅ぐ。
あれほど射精したにも関わらず、僕の男根は
いまだに赤くパンパンに膨らんでいる。

ドキ
ドキ

ハァ〜♥
ハァ〜♥

ガハ
ガハ

ズクッ♥

ズクッ

「んふふ♥ かわいいですねえ♥

ゆうしやさま、私ゆうしやさまのことどんどん好きに
なっちゃってるんですよねえ♥

…食べちゃいたいくらいに♡」

ぜうはそういうと、ぬらぬらと唾液にまみれた口を開け、

ゆっくりと桃色の舌を伸ばしてくる。

ガハ

「ほらぁ♡ やさしく舐めてあげますよぉ…♡」
まるで別の生き物のように、妖しく動く舌が
僕の男性器をゆっくりと這い始める。

媚薬によって、感覚がおかしくなっているのもあるが
顔面騎乗だけで、男性器に触られてこなかったのが効いている。
急に触られたことによる快楽で、腰がビクビクと痙攣する。

「あはぁ♡ さっき射精したから
ち○ち○にまだ精液の味残ってますねえ♡」

ぐい
ぐい
ぐい

しゅ
しゅ

しゅ
しゅ

ぐい
ぐい

ゼラはまるで飴玉を大事に舐めるように、
ゆっくりゆっくりと、竿の茎部分に舌を往復させる。
「あぁ♡ これえっ♡ 何倍もきもちいい♡♡♡」

ぐんぐん♡



「んふふ♡ 気に入ってくれて嬉しいですよ♡
 はい、今度はちよっと激しめにいきますよ♡」
 そういうとゼウは、舌の動きを変則的にし、速度を上げてくる。
 裏筋からカチ首、鬼頭から尿道口と、舌が絡みつく。
 その瞬間、脳内でチカチカと快楽信号が弾ける。
 「こりえっ♡ こりえだめえっ♡ ち●ち●おかしくなってるゆうつ♡♡♡」
 媚薬によって、想像以上の快楽を与えられた僕は
 よだれを垂らしながら、逃げるように腰を引かせる。

「こりえっ♡こりえだめえっ♡ち●ち●おかしくなつてりゆうっ♡♡」

ぢ
うは、
うは、
ハ

命令

20

This vertical strip shows a character's face in profile on the right side. On the left side, there are stylized pink and white sound effects or text, possibly representing a character's name or a specific sound.

「あっ逃げちゃダメですよぉ♡」
ゼラは逃げようとする僕の体に
スライム化させた腕を伸ばし

無理やり近くに寄せさせる。

柔らかいながらも、やはり想像だにできない異常な腕力で

固定されてしまった僕にはもう抗う術はない。

「んふる♡悪い子ですねえ♡」

これはちよおっとお仕置きしてあげないといけませんねえ♡♡」

ゼラは目を爛々と赤く輝かせ、舌舐めずりをする。

やがて彼女は、再び口を大きく開かせる。



「パクッとし●ち●を咥え込んだ。
「ふあい♡お仕置きですよぉ♡」
今までとは違う、ぬったりとした暖かさを伴った快楽が
男性器を包み込む。
「あっああっ……♡」
唐突な責めに、僕は目の前を真っ白にして
口をパクパクと開け、吐息を漏らす。
「んふふ♡ やっぱりこれですよねえ♡これなら、ゆうしやさまの雄汁
一滴残さず全部飲みちやいますもんねえ♡♡」
「あっああっ♡ やめっ、喋らないでえっ♡」
男根をくわえられたまま、せうはもごもごと口を動かす。
「んふふ♡ 嬉しいくせに♡♡♡
…ああああ、せうせうらあはははあ♡♡」



ゼラは、唾え込んだ状態のまま、頭部を前後させ、男性器を責め始める。少し舐められただけで、気持ち良さからおかしくなりそうだった僕は

脳で弾けていた快楽信号がショートしそうになる。
目の前が明滅し

僕の下半身は一層ガクガクと異状なほどの痙攣を起こす。



「んふふ♡ まだまだ行きますからねえ♡」

ゼラはそういうと、口内で舌を動かして

頭の前後運動と反した動きで、スライムに戻った舌を

男性器にまとわりつかせる。

頭が引けば、舌の根元で茎を締め上げ

頭が押し込まれれば、鬼頭がベロベロと舐め回される。

スライムだからこそできる、変幻自在な責めは

昨日まで女性を知らなかった僕には

到底耐えられるようなものではない。

一気に射精感を膨らませた僕は

爆発するような奔流を解き放った。





「あっああっ…脳が…ぎもちいよぐなっで、グワングワンずるっ…♡」

「んふる♡気持ち良さそうですぬゆうしやさまあ♡」

でも、全然足りないんですよねえ。
ゆっしやさまを私のものにするためには
もっと気持ち良くなってもらわなくっちゃいけないんです♡」

腰元を固定していたスライムを蠢かせる。

やがて目の前にいたゼラは、ぐにやりと人の形を崩し、僕の背後に、回っていた右手のほうに、スライム状の体を回り込ませる。

二回おち、後ろの雄六にもお位置さしてあげますよね♡
見なくてもわかる。満面の笑みのゼウが、後ろにいる。

背中に戻ったゼラは、僕のお尻に唐突に何かを差し込む。

「んっ……んぎいいひいいい♡」

僕は白目を剥いていた目を

飛び出すのではないかとというぐらい見開き振り返る。

ゼラは、僕のお尻の穴に

指を挿入していた。

「あがあっとなっとなっ……」

なにこれえ♡♡」

「ああ♡雄穴キツキツですっねえ♡」

ゼラの指は

腸壁をぐにぐにと押す。

「ん……？ ……あ♡ あったあった♡

これ探してたんですっよねえ♡」

ぐいぐい

おっ
おっ
おっ
おっ
おっ

ぐん

がが
がが

ゼラは宝物を探し当てたような表情を浮かべる。

「なにっ……怖いっ……怖いよおっ……♡」



「はあい♡ 男の子のよわあいところこんちは♡♡」

「いつ…いああああ♡♡♡」

お尻の奥で、スライムが何かを押している感覚がする。

押されるたびに、今まで知りもしなかった膨大な快楽が暴れだす。

「これは前立腺っていう、ちよっと刺激されるだけで
とっても気持ち良くなれる すごいところなんですよぉ♡」



「やめへえ…これえっ♡これえおかしい♡おかしくなるうっ♡」
「大丈夫大丈夫♡ 怖くないからねえ。わたしに全部任せてくださいねえ…♡」

「ああっ♡ あっあああああ♡」
「ん~~~~反応いいですね♡ ち○ち○も、し○し○として気持ちよくしてあげますよ♡」
「あひいいっ♡ だめっだめこれえっだめえええ♡」
「ゆうしやさま、こんな情けなく喘いじやって、魔物なんて倒せるわけなかったね♡
でも、大丈夫ですよ♡ 私が全部お世話してあげますからねえ。」



「だからね…
ほら…♡」
「イケよマン勇者」

ぐちゃぐちゃ

たんたん

ぐちゃぐちゃ

ちゅーちゅー

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐちゃぐちゃ



「あひいっ♡♡」
射精を終えた男性器を、冷たい感覚が襲う。

「言ったでしよお♡ 私の体は変幻自在♡ 太ももにオナホ生やすことなんて造作もないのでえす♡」
チ○コを、青いゼリーが包み込んでいる。ほとばしった精液にも再度スライムが群がり
ぐちゅぐちゅと咀嚼している



「よおし♡ 射精したばかりの敏感チ○ポ、綺麗に磨いて、もっと気持ちよくなっちゃおうかあ♡♡」

グチュグチュと、スライムオナホが伸縮を繰り返して男根を刺激し始める。

「んふふ、オナホといつても、中はおま○こを模してるから」

「本物みたいで、きもちいいですねー!♡」

「あははあ♡
なっさけなああい♡
マゾ勇者様でも流石にこれはきついですよねえ♡」

「んふふ♡ もぉ〜っときつくなっちゃお♡」
途端、鬼頭とお尻の穴に、同時に妙な感覚がする。

鬼頭には、オナホ内部にも関わらず、糸を束ねた筆…?のようなものが
撫で付けてくる感覚がする。
こそばゆいような感覚が、敏感な鬼頭に異質な快楽を与えてくる。



またお尻では
差し込まれていた指が膨れ上がり、
連なったボールのようになる。イボがついたボールは腸壁をグリグリと押し広げる。

「ひぎっひぎっひぎいあいあああああ♡」

「あははははっ♡ かわいい♡ 快楽で悶え苦しむゆうしやさまかわいい♡♡」

ゼラは笑いながらも、責める手を一切緩める様子はない。

なぶられ続けるお尻と男性器。

涙と汗と、ありとあらゆる汁が体から流れ、ぐちゃぐちゃになる。

やがて、股間に射精感とは違う、暴れるような快楽が集まり始めた。



「あゝ♡ おもろしーしちゃう?♡ なさけなあゝゝ、雄汁出しちゃうおゝ♡♡」

ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ

ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ

ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ

ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ

ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ



今回は精液じゃなくて



七三

[illegible]

やがて長い射精を終えた男性器は
ずるりと解放される。

流石にこれほどの射精、潮噴きを行えば
媚薬でいきりたった男根も固さを失っていた。
様々な液体でぐちゃぐちゃになった男性器は
快楽の余韻でたまに痙攣している。

「んふふ♥ さあ今日は

ここまでにしてしましようか。

続きは明日♥ ゆうしやさまは

明日から生まれ変わらせて

あげますからねえ♥」

後半、ゼラが言っていたことは

あまり耳に入らなかった。

強い快楽から、

今日も同じく意識を失ったのであった。



目が覚めると、また森の中…

僕は地面に仰向けにされ拘束されていた。
手足には当然のようにスライムがまとわりつき
地面に固定されている。

昨日の責め苦によって、気怠さで目が覚めるかと思うと
決してそうではなかった。

何故か体は元気であり、意識は非常にはっきりとしている。
…いや、させられているのかもしれない。

防音の魔法を使えるスライムが
回復魔法を使えないとも限らない。

僕は必死に打開策を考える。

あれほど酷い目に遭いながらも

僕はまだ諦めはしていない。

それどころか逆に少し希望が見えた。

昨日、一昨日とゼラは僕のことを快樂責めにするものの
殺しはしようとしなない。

殺そうとすれば簡単に殺せるにもかかわらずだ。
つまりこれは

彼女の一瞬の間隙さえつければ
逃げられる可能性があるということでもある。

今現在も

ゼラの言うことを信用するのなら

僕に使われているのは、ただの防音魔法だけである。

防音だけなら…

誰かが通りすぎる可能性も決してゼロではない。

僕は心の中で少しずつ計画を立て…

ガッ



「ただいまゆうしやさまあ
ちよっとお顔かりますよお♡」

戻ってきたぜうが、突然僕の顔にでんとお尻を乗せる。

「んぐうっ!」

「はゝ勇者様のお顔座りやすいですよおゝ♡

やんっ♡ ゆうしやさま、変に動かないでくださいよおゝ♡」

ぜうはケタケタと笑いながら、お尻をグリグリと押さえつける。

「んぐうっ!」

「んぐうっ!」

「んぐうっ!」

「んぐうっ!」

「ゆうしやさま、なーんか色々と考えてるっばいですねえ♡
私は応援してますお♡
だって足掻いている人を引き摺り下ろすのが
一番面白いですからねえ♡
ほら、お尻の下でがんばれえ♡」
嘲笑うぜうに、僕は心の中で強く決意する。
（耐える…耐え切って見せる…なんと言われようと僕は耐え切ってやる!）

「ふう〜ん♡ まあせいぜい頑張ってくださいね♡
はあい、足でち●ち●しつけちゃいますよぉ♡」
そういうとゼラは
僕の顔にお尻を乗せたまま足を動かし、股間を挟み込む。
ぬちゃりとした冷たい感覚が、背筋に快楽の電撃を走らせる。

「ほらほら♡ スライムの足の裏で気持ち良くなりましたよね♡
お顔もお尻でグリグリしてあげますよぉ♡」
ゼラは腰を強く押し付けながら、男性器を足で弄ぶ。



「んっ♡んぐっ♡」

大きなお尻を顔に押し付けられ、息ができずに悶える。

「あはは♡ ゆっしやさま頑張ってえ♡」

ゼラはケタケタと笑いながらも、常に足やお尻を動かしている。

勃起した男性器は、流れ出たカウパーと

ゼラのスライムですぐに液体まみれになる。



だっだっ

だっだっ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

押しつけられるお尻から、顔を避け空気を吸う。
すぐに射精しそうになる下半身に力を込めて
ギリギリのところで踏ん張り
ゼラに負かされないようにする。

「んふ♡こおら逃げちゃダメですよ♡」

そんな悪い子にはごうです♡」

「もっおっおおぼぼぼっ!」
押しつけられていたお尻が突然形を崩し、僕の頭を取り込んだ。
半液状となったお尻が僕の頭をからめとり
がっちりと離さない。



ゼラの体内は、水のようになっており
僕は彼女のお尻の中で、口から空気の泡を吐き出した。
「あはっ♡ 溺れちゃってますねえゆっしやさまあ♡
ほらほら♡ 射精したら、水の中から出してあげましょうかあ?」
ゼラの言葉が水の外からくぐもった音で聞こえる。

「続いて高速足コキどうぞ〜♥」
溺れる僕を意にも介さず、ゼラは足の動きを早めていく。
足で挟まれることによって生み出される圧が
男性器を痛くないぐらいに潰して、精を搾り取るようにする。
「んぽおっ♥ んぽおおお♥」
溺れていても快楽に抗えない僕は
溺死への恐怖と、与えられる強い快楽に
脳を揺さぶられる。

「あははあ♥
びくびくってなってますねえ♥
溺れながら感じるなんて
変態さんですねえ♥」
「ぽ〜おぽ〜ぽぽぽぽぽぽぽ〜♥♥♥」

「んふふ♥ 射精しそうですねえ♥ えらいえらい♥
言われたことをすぐ守れるのはえらいですよお〜♥♥
ゼラは嬉しそうに僕をあやすと足をぐいと持ち上げ
とどめとばかりに一気にしごきあげた。





「よいしょっと♡」

ゼラは僕の顔を覆うスライムを少しどかす。

お尻はまだ顔の近くにあるが

スライムから解放された僕は、咳き込みながら外気を吸う。

喉から体内に水が入ったからか、肺が傷む。

その間も僕の男性器からは、余韻で精液が漏れ出る。

ゼラは嫌らしい笑みを浮かべながら

僕のことを見下ろし口を開いた。

「んふる♡ ゆうしやさまあ…」

まあゝた いっぱい飲んじやいましたねえ私のことお♡」

唐突にそういう彼女は、依然としてニヤニヤと笑う。

必死に空気を取り込む僕だったが、彼女の言葉からは不穏な気配を感じとった。



「わたしね♡ いろんなところを旅してきましたんですよ♡
どうやって旅してきたか分かります?」

「げほっ…なっ…」ほお……なに言ってるんだお前っ…げほおっ…」

「人体って、たあくさん水入ってますからねえ♡♡

わたしもとっても入りやすいんですよ♡♡」

ゼラが今までの中で一番悪意に満ちた顔で笑う。

目はギラリと炎のように赤く輝き

口角が吊り上がる。

まるで、獲物にとどめの牙を突き立てようとする獣のように。

「勇者様、だいじょうぶですよ♡♡

私と一つになりましようねえ♡♡」

ゼラはそういうと、スライムを踊りかからせてきた。



「ほら飲んでえ♥ 私をもおっと飲んでくださあい♥」
「もがつもがああつ!!!」
ぜうはそういうと、また大きなお尻を顔に下ろす。
再度空気を奪われた僕が、尻の下でもがく。
そして次の瞬間―必死にもがく僕の口、鼻から
スライムがずるずると侵入してくる。
彼女の粘液に、本来何も侵入させてはいけない、
深いところまで犯されていく。
「大丈夫ですよお〜♥
私が入って、脳やら内臓やらを
ちよろろっといじるだけですよお♥
一つになるって言っても
人間の部分は一部
残してあげますからねえ♥」



んぐううううう!!!」

体の中をスライムが蹂躪していく。
無理矢理侵入してくることによる痛みが
本来はあって然るべきなのに

体の中をスライムが蹂躪していく。
無理矢理侵入してくることによる痛みが
本来はあって然るべきなのに

そこに痛みはなく、異質な快楽が存在する。ずりずりとスライムが体内の壁に触れるたび体が、脳が、快楽で満たされていく。

「怖くないって言われても怖いです」

だから、変えちゃうときは

目一杯気持ちよくしてあげるんですよお♡」

ゼラはどこまでも優しく
そしてどこまでも残酷に笑う。

「ほらあ♡引き摺り込んで

あげますからねえ♡」

ゼラは指先を下半身に向ける。

「んひいつ♡」

やがて

大量のスライムが

集合し

僕の男性器に群がる。

しばらく男根を

弄んだスライム群は

男性器を包み込みながら

形をなしていく。



スライムたちはやがて、もう一人のゼラを形作る。
彼女は僕にまたがり、その秘部で僕の男性器を包み込んでいた。
「ほおら♡
気持ちよくしてあげるから
安心して
イッていいんですよ♡」
二人のゼラが同時に言う。



変えられていくことの
恐怖が快楽に上塗り
されていく。
そんな事実を
不思議に思うことを
少しすつしなく
なっていた...

「あんっ♡あんっ♡ゆうしやさまのチ●ポ、気持ちいいですよぉ♡」
股間にまたがる二人目のゼラが、上下運動を始める。

スライムの膣は
僕の男根にびったりと
張り付きうねり
上下運動のたびに
搾り上げるように
責めてくる。

「私もゆうしやさまのお顔で
気持ちよくなってますっ♡」

「んっ♡んっ♡
気持ちいい♡」

「はっ♡はっ♡
すっ♡すっ♡」

「んっ♡んっ♡
んっ♡んっ♡」

「んっ♡んっ♡
んっ♡んっ♡」

顔に乗るゼラは
ぐりんぐりんと
腰をグラインドさせ
顔に女性器を押し付ける。
耳や口からは
どんどんとスライムが
流れ込んでいき
中と外から
体を蹂躪していく。



「あはあでてますねえ♡
んふふ相変わらず美味しい精液♡♡」
「だいふ私のこと好きになつてきましたねえ♡
こおんなにスライムを
受け入れてますよお♡」
のしかかる二人のセラが
腰を動かす。
股の上のセラは
より味わうように
耽美的に。

顔の上のセラは
よりもたれかかり
煽情的に。



「あははあ♡
ほらほらあ♡♡
まだまだいきますよお♡」
「私が体の中から魔法で
精液を無理やり作って
あげますからねえ♡
いくらでも
射精できますよお♡」
最後に付け加えられた、
終わりが無いという事実も
僕の耳には届かなかった。

それから何時間たったのだから。
僕の意識は容赦のない快楽で、断片的に飛んでいる。
射精のたびに辛うじて残った意識が呼び戻され
ゼラの声が聞こえる。

「はあい♡」

これで絶頂

99回目♡♡♡

「おはあー♡
いっぱい出たねえ。
まあいっぱい出るように
作りかえてるのは
私たちなんですけどね♡」

ケタケタと笑う二人の
ゼラは、やがて笑いのを
やめて「さっさと目醒めなす。
やめてもうしやなま」
「それなら最後のときめ……♡
「さっさと目醒めなす」
「さっさと目醒めなす」



「うあつうああああつ」

は、は、は、は、

泣き声を上げ叫ぶ僕。

ゼラはそんな僕のことには
意にも介さず
無言で搾精を続ける。
やがて男性器が
最期の精液のために
ぶるりと震える。



強烈な射精を行っ僕の全身に
スライムが覆いかぶさってる。

やがて
スライムと僕との
体の境界がなくなり
意識が溶けていく。

スライム越しに
二人のゼラのあざけるような
笑い声をただただ聞いていた。



鎧を着た兵士が二人。森の中にいる。

二人は近くのコロシムがある街の衛兵であり

この森に強大な魔物が住み着いているという噂を聞き

偵察にやってきていた。

「気を付けろよ……この森の中は、ただでさえ強い魔物が多いと言われる森だ。

今回はあくまで偵察……無理して先行するなよ」

先輩らしき兵士が、後輩らしき兵士にそう諭す。後輩兵士は彼のその言葉にうなづく。

「たす……て……」

「……ん？ なにか、人の声が聞こえるな……」

「たすけ……たすけて……」

「……」

兵士二人は顔を見合わせ

助けを呼ぶ声のもとに

駆け出していった。

ガニャガニャ

ガニャ



「大丈夫か！」
「あ……衛兵さんたち……
たすけてください……
森の中で魔物に襲われてしまつて……」
金髪の少年が
足を引きずりながら
衛兵二人に近寄ってくる。
「……ん？ お前、コロシアムに出てた、
選手の一人じゃなかったか……」
先輩兵士が
すぐ近くまで寄つてきた、
少年の顔を見て気づく。
すると、今までの様子を二変させ
少年の目が赤く染まり
彼の鎧が突然
どろりと溶け落ちた。



「親切な兵士さんたち…
僕のマスターのご飯になってください……」
少年の装備が溶け、彼の体を包み姿を変える。
少年の髪は女の子のようにリボンで
結わえられる。
衣服は露出度を上げ、各部にフリルが
あしらわれている。
そんな女の子のような様相だが
彼の下半身は
男性器の形がはっきりと見えるほど
腰布がテントを張り
ビクンビクンと脈動し、雄を示す。
「きつきさまっ！魔物の類があっ！」
兵士が剣を抜こうとした一瞬—
死角からぬちゃりと
スライムが
飛びかかった。



暗い森の中、青い粘液がぐちゃぐちゃと音を立ててうごめく。
「んふふ♡ あー…まさかだったあ♡♡ やっぱり角はったおっさんの肉は
まずいですねえ♡ あんなのは精液搾り取る前に
ばっくり一回で食べてしまうにかぎりますよお」
「あっあひっ♡ ちくびっ♡ ちくびいじるのやめてえっ♡」
「それにひきかえ、ゆづしやさまは良いですわね♡ 乳首「リ」リ、
おち●ち●キyunキyun締め付けられるの気持ちいいですわね♡♡」



複数人に体を分けたせうが、僕を囲み込み囁りながら責めていく。
拘束されているわけでもないが、彼女のことを拒めない。なぜなら僕は
すでに体のいたるところをいじられ、彼女の奴隷にされているからだ。

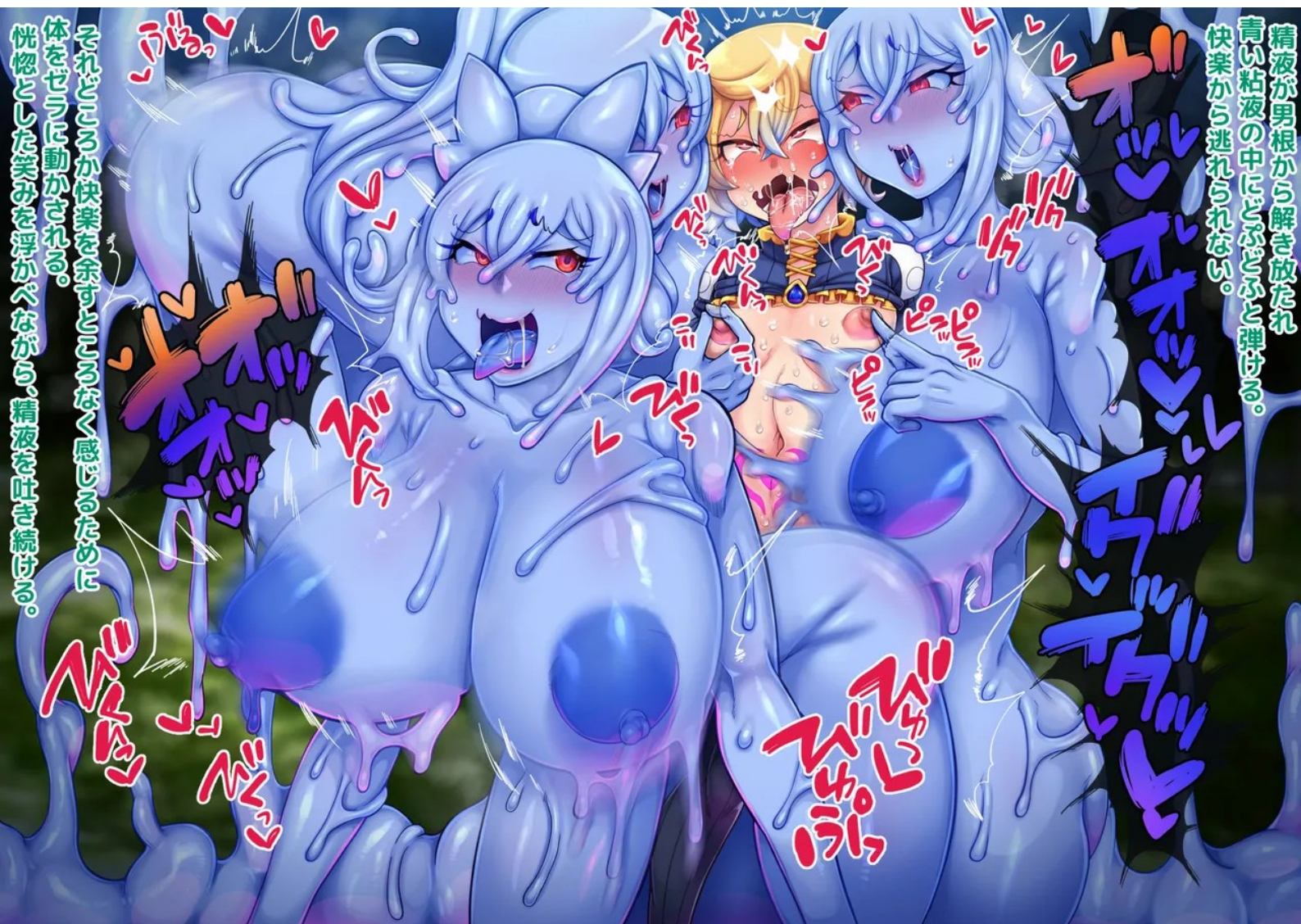
「うあっうあっ♡」
男根を咥え込むぜうが、膣内のしまりを一層強くする。
パンパンに張りつめたチ●コが暴発間近になる。

「あははあ♡ ほらこれえ♡ ゆうしやさまの喘ぎ声すきぢい♡」
ぜうたちは笑いながら、体をぬちゃぬちゃとすりつけてくる。
「あはあ♡ まあでもそろそろ終わらせて先を急がなくなっちゃね…♡
ほおらイケッ♡ ご主人様がイクの許してあげますよお♡♡♡」



「あッ…あッ…イクッ♡♡イクッ♡♡♡
奴隷チ●コから情けなく射精しましゅううっ♡♡♡」

精液が男根から解き放たれ
青い粘液の中にとぶとふと弾ける。
快楽から逃れられない。



それどころか快楽を余すところなく感じるために
体をゼラに動かされる。
恍惚とした笑みを浮かべながら、精液を吐き続ける。

「あっ……ああっ……♡」

「んふふ……まあた勇者らしくない射精しちゃった♡ 情けないねえ♡」
僕の耳に、ゼラが内緒話をするような小声で囁く。

「まあ、気にすることないですよ。」

私が一生いてあげますからねえ♡」

もう一人のゼラも、吐息を耳にかけながら
くすぐるような声を出す。

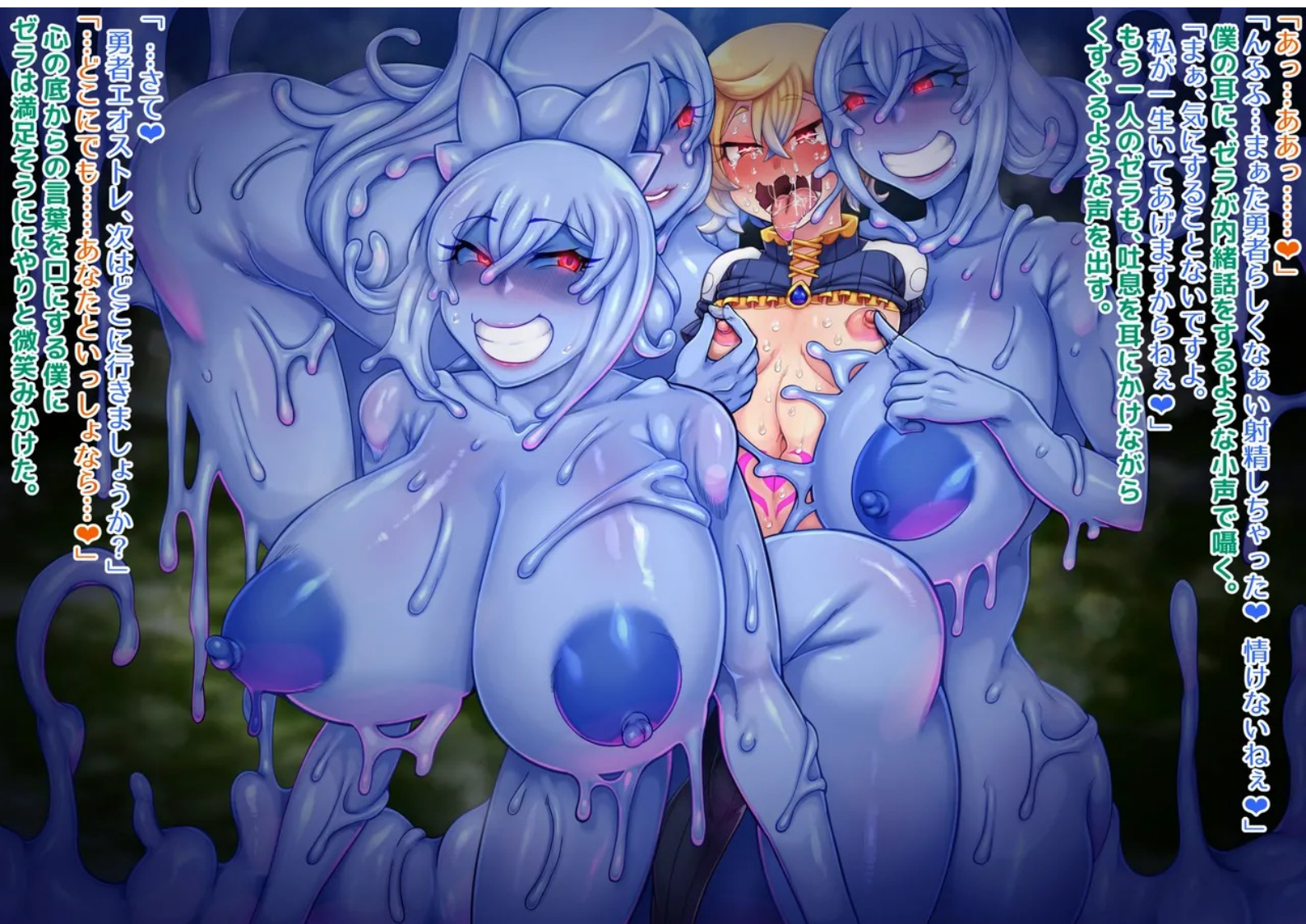
「……さて♡」

勇者エオストレ、次はどこに行きましょうか？」

「……どこでも……あなたといっしょなら……♡」

心の底からの言葉を口にする僕に

ゼラは満足そうににやりと微笑みかけた。





ゼラ

流浪の女格闘家



基本情報

種族：スライム(高位)

職業：格闘家

戦闘能力：☆☆☆☆★★

戦術：格闘 スライム技

魔術：中級初歩(幻惑)

特性：柔軟な体

説明

女格闘家。非常に武術に長け、各地を旅している。旅の途中では格闘家の大会に出場している。心身共に誰よりも強くなることを目標としている。

…というのは表の顔であり、本来の彼女は高位のスライム族の魔物。蹂躪し性的にも物理的にも人間を食らうことを目的としている。大会には強い男を探すために人間に化けて出場している。

擬態中は衣服に見える部分もすべて自身の体で、変形させて身にまとっている。男を誘惑することを楽しんでおり、わざときわどい服を着ており、ハプニングを装い、恥部を見せつけたりする。

この姿は、ある村娘に擬態した姿であり、他のどんな姿にも変形可能。また、彼女はとある魔術師の魔法により、高位なスライムになったため、中級魔法の簡単なものまで使える。

エオストレ

駆け出し
勇者



基本情報 (初登場時)

種族：人間

職業：駆け出し勇者

戦闘能力：☆☆☆☆☆

戦術：剣術 (初級)

魔術：回復魔法 (初級)

特性：勇者の加護

説明

駆け出しの勇者。

魔王を倒すために冒険に出たが
実力も経験も不足しており
周囲の人間からは
彼が魔王を倒すとは本気で思われて
いない。

とある高貴な生まれだが、他親族
にくらべ立場が弱く
疎まれて、勇者として家を出されて
しまった。

なんとか家の立場を強めるため
勇者として功名を立てることを目
的にしている。

性格は優しいが、年相応な未熟さ
が目立つ。

ナイフでの素早い攻撃を中心とし
た戦術を得意としており、
単純な腕力は弱い。

勇者の固有特性「勇者の加護」
で比較的打たれ強い。

著：丹羽 時来 (たんば とき)

pixivID：12667741

Twitter：@ChickenandTiger

あとがき

ご購入いただきまして、誠にありがとうございます。
私、サークル「トリノス」の丹羽時来と申します。

本作は私の初CG集でして、色々と頭を悩ませながら
作成いたしました。

モンスター娘の中でも
かなりポピュラーな部類のスライム娘を選んだわけですが
やはりスライム娘にぐちゃぐちゃにされるのは
ファンタジー好きマゾ男の夢かと存じ上げますので
避けては通れぬ…否、これを避けるなんてとんでもない！
というものかと考え作成した次第です。

余すところなく苦勞いたしました
こうやって完成した作品を見ると
なかなか良い出来になったのではないかと
手前味噌ながら思います。

モンスター娘やらマゾ男向けのイラストやらを、メインで
描いていくかと思いますのでよろしければまたどこかで
拙作を手にとっていただけますと幸いです。

ではでは、良いマゾ男ライフを！

丹羽時来 (2021/4/4)